

## 韓国初の女性大統領「朴槿恵」

二階 宏之

朴槿恵は、一九五二年二月二日に韓国慶尚北道大邱市で故元大統領の朴正熙、陸英修の間に一男二女の長女として生まれた。当時は朝鮮戦争の最中で、国連軍と共産軍との間で休戦協定に向けての交渉が繰り返されていた。

休戦協定が結ばれた一九五三年、軍人だった朴正熙はソウルに家族を呼び寄せた。当初は、米一俵も買えない月給で貧しい生活をしいられたが、一九五八年に少将に進級し、ようやく家らしい家を手に入れる。一九六三年に朴正熙が大統領に就任すると、生活の舞台が青瓦台（大統領官邸）に移った。朴槿恵はそのときの印象について後述の自伝のなかで「とてもなく広い庭に圧倒された」と回顧している。しかし、母親の陸英修は、子供たちが特権意識を持たないように平凡な生活を送るよう心がけた。お弁当のおかずはキムチや卵焼きなどの質素なもので、当時一般の家庭にはなかった高価なおもちゃは与えなかった。

一九七四年八月一日、母親の陸英修が射殺される事件が起きる。朴槿恵は悲しみに打ちひしがれる一方で、二二歳で母親代わりにファーストレディーになるという新しい使命

が与えられた。一九七九年一〇月二六日には朴正熙も銃弾に倒れるという悲劇に見舞われる。朴槿恵は妹と弟を連れて青瓦台を離れ、家長として新しい生活を始めるが、世間では朴正熙に対する罵倒が続ぎ、冷たい現実に立ち向かうことになる。

一九九七年に韓国は金融危機に陥り、IMFの救済を受けた。朴槿恵は、今まで築き上げた国があっけなく崩れていくという切迫な気持ちになり、大韓民国発展のため政界に入ることを選択し、ハンナラ党に入党した。二〇〇四年三月にハンナラ党代表に就任すると、翌月の総選挙での完敗が予想されるなか、一一一議席を確保するという善戦をみせた。二〇〇六年五月二〇日、朴槿恵はソウルでの地方選挙遊説中に右ほほを二cm切られるという衝撃な事件に遭遇する。その時受けた傷を国民の傷と受け止め、残りの人生を生き抜こうと決心した。

二〇〇七年のハンナラ党の大統領選候補者選挙では李明博に僅差で敗れたが、二〇一一年一二月に党の非常対策委員長に就任すると、二〇一二年二月に党名をハンナラ党からセヌリ党に変更し、党の刷新を図った。そして、同年八月に大統領選候補に選出され、同年一二月一九日の第一

八代大統領選挙で勝利をおさめた。

●朴槿恵著・横川まみ訳『絶望は私を鍛え、希望は私を動かす…朴槿恵自叙伝』（晩聲社 二〇一二年）

この本は、二〇〇六年の傷害事件をきっかけに、新たな人生の出発として記録した朴槿恵の自伝である。青瓦台での生活、ファーストレディーとして国際舞台にたった経験、母親と父親が銃弾に倒れた後の悲しみと絶望、青瓦台を離れた後に費やした社会事業、政界復帰のきっかけ、政治家としての活動などの多くの物語が語られている。特に両親から受けた教育がその後の朴槿恵の政治活動に関して与えた影響は大きい。母親は大統領の子供という環境に振り回されず、子供たちが平凡に成長するように気を配った。そして、責任感と慎重さを強調し、どんなに小さい間違いでも心から反省しなければ厳しくしかった。朴槿恵は母の教育を受けたおかげで、「配慮」という人生の一番大切な財産を得たという。そして、両親の国政運営をそばでみながら、自然に政治感覚や愛国心を身につけていた。また、ファーストレディーとして父親と対話することで、歴史や経済、安保の知識、外交能力を習得した。一九九七年に起きた金融危機は、朴槿恵にとって大変な衝撃だった。ホームレスが増え、家族が崩壊していく姿

をみて、小さくても自分ができることはなんだろうかと悩み、「政治家朴槿恵」の道を行くことを決意する。

●李相哲著『朴槿恵（パク・クネ）の挑戦—ムクゲの花が咲くとき—』（中央公論新社 二〇一二年）

「樞」という漢字は、韓国の国花である無窮花を意味する。「恵」には、善良な女性、聡い、賢いという意味がある。朴槿恵の両親は、三日も頭をひねり、「樞恵」という名前をつけた。この本の前半部分では朴槿恵の生い立ちや陸英修の母親像を描き、後半部分では父親や北朝鮮、サッチャーなどの朴槿恵が乗り越えなければならぬ課題について解き明かしている。朴正熙という存在は、朴槿恵にとって力の源泉でもあり、アキレス腱でもあるという。朴槿恵は朴正熙の功績を肯定するが、対立する勢力はその不法性を問いただして攻撃の手を緩めない。対北朝鮮関係の改善も韓国大統領が克服すべき国家の死活問題である。二〇一二年の大統領選挙出馬宣言で朴槿恵は、「国民の夢が実現できる国を作る」と語っている。この言葉には、サッチャーのように力強いリーダーシップを前面に出すのではなく、国民に奉仕するリーダーを目指すというメッセージがこめられている。（にかい ひろゆき／アジア経済研究所 図書館）